

「互いに愛し合いなさい」
(ヨハネによる福音書15:9-17)

今日の使徒言行録にこうあります。「このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリストと呼ばれるようになったのである。」わたしたちはあたり前のようにクリスチャンとかキリスト者という言葉を使いますが、当初はその集団はユダヤ教の一派に過ぎませんでした。しかし、アンティオキアではユダヤ教とは異なる集団として、「キリスト者」として認知されるようになっていた事がわかります。つまり、「どうやらこの集団はユダヤ教の人々とは違う」と思わせる「**なにか**」があったのでしょ。もちろん、「イエス・キリストを主と崇める」ことがもっとも大きな特徴であったことでしょう。しかし、たんなる「概念的特徴」だけで人の認識までも変えることはそうそうありません。つまり、人々にはきっと、もっと具体的な姿が「違い」として伝わったのだと思います。それこそ、使徒言行録のこれまでの記述にある通り、互いに財産を持ち寄り、それぞれが支え合って「神の家族」として生きている姿です。そして、迫害を受けても、聖霊と信仰に支えられて生き抜く、そればかりが力強く宣教していくバルナバやサウロの姿です。周囲の人々は、そのような「姿」を通して、「キリスト者」を認識していったのではないのでしょうか。

では、そのような「キリスト者」たちは、どうして神の家族として互いに支え合って生き、力強く宣教することができたのでしょうか。それこそ、今日の使徒書と福音書に繰り返し語られる、「愛」がその行動や思考のすべての根源にあるからに他なりません。「愛」ゆえに、彼らは「キリスト者」でした。「愛する者たち、互いに愛し合いましょう。」「神は愛だからです。」「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。」…そして、主イエスが授ける究極の掟。

「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。」

主イエスは「これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなた方の内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。」と言ってこの掟を授けてくださいました。繰り返しますが、わたしたちが「喜びで満たされる」ために、主イエスは「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。」という掟を授けてくださったのです。その愛とは「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」と言われるほどの愛、「敵をも愛する愛」です。その愛をわたしたちに届ける出来事こそ、十字架の出来事です。今日の使徒書は、「愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。」「神は愛です。」と語ります。そして、その神の愛こそ、「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」とあるように、主イエスの十字架の死によってこそ、「友のために自分の命を捨てるほどの愛」がわたしたちに明確に届けられたのです。

「友のために命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」と言われる主イエスは、わたしたちのことを「友」と呼び、お言葉どおりご自分の命を差し出してくださいました。それほどにわたしたちのことが大切に、愛してくださっているからです。この愛は、主イエスが「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた」と言われるように、

主イエスを通して届けられる神からの愛です。神から主イエスへ、主イエスからわたしたちへと愛が届けられています。人間の愛には限界があります。しかし、わたしたち自身の愛が枯渇することがあっても、神の愛は枯れ果てることはありませんから、わたしたちは愛に飢えることはありません。「キリスト者」とは、この神の愛を知り、神の愛をいただいた者として、「互いに愛し合う」、しかも、「友のために自分の命を捨てる」ほどの愛に生きようとする人間のことであり、教会とはその人々の集団に他なりません。アンティオキアで「キリスト者」と初めて呼ばれた人々の姿こそ、それを具体的に実践して生きようとする人々の姿だったのでしょ。

ヨハネの手紙はさらにこう続けます。「愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。いまだかつて神を見たものはいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内に留まってくださり、神の愛がわたしたちの内ですべて全うされているのです。」このことから分かるのは、アンティオキアの「キリスト者」たちの姿が周囲の人々に伝えたものは、たんなる「善良な人々」とかいうこの世的なイメージにとどまるものではなかった、ということです。「キリスト者」と呼ばれた人々、愛の実践に生きた人々が伝えたものこそ、「神の愛」であったのです。「いまだかつて神を見たものはいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内ですべて全うくださり、神の愛がわたしたちの内ですべて全うされている」からです。「キリスト者」が互いに愛し合っていくところに、神の愛が全うされます。そして、その神の愛が人々へ伝わっていくのです。それこそが、「宣教」の本質にはほかならないとわたしは思います。つまり、わたしたちが神の愛をいただき、神の愛を知るものとして互いに愛し合って生きる、生きようとするところにこそ、神の愛が全うされ、その神の愛が人々へと伝わっていくこと、そして「神の愛の家族」が広がっていくことこそが宣教であり、教会が宣教共同体として生きているということなのです。

そしてその共同体にこそ、真の喜びがあります。なぜなら、「わたしの喜びがあなた方の内にあり、あなたがたの喜びが満たされる」ことこそ、主イエスが願い、命をかけてくださったことだからです。「友」なるわたしたちのために命を投げてくださいました主イエスは、「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたを選んだ」と言われ、わたしたち一人ひとりに神の愛を溢れんばかりに注いでくださいます。その愛をいただいたわたしたちがその愛を互いに持ち寄るなら、この世界に愛が溢れます。そのとき、わたしたちは真の喜びのうちに生きることができます。人間の真の喜びとは、そこにこそあるのです。

「互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」

これは、主イエスからの「命令」です。わたしたちが真の喜びの中を生きることができることを心底願い、命をささげてくださいました方の「命令」です。この命令に従う者、「キリスト者」として生きていきましょう。